ミッドナイト・サーカスショウ

作　折田

登場人物

ピエルカッチ　サーカスの女ピエロ。両頬に涙のペイントがある。
ピエタン　サーカスの男ピエロ。
ピエリーナ　サーカスの女ピエロ。司会担当。
団長の女
ビース　シルクハットを被っている。
ジャグラー
絶世の美女　絶世の美女でなくともよい。その場合は被り物が望ましい。
女客1　サーカスのショウのお手伝いに参加した客の一人。
女客　カーニバルリズムに焦がれる客。
たくさんの声

注意点
女客と女客1を客席にスタンバイさせる。
ジャグリング出来る人物が必要。

1

舞台の中央にしゃがんでいる子供のピエロにスポットライトが当たる。

ピエルカッチ　「食べたくないよう」
声　「食べなきゃいけないのよう」
ピエルカッチ　「食べたくないよう」
声　「食べなきゃ死んじゃうよう」

間。

ピエルカッチ　「死んだ方がいいよう」

声の主であるサーカス団長の女、舞台に登場。
ピエルカッチの頬をぶつ。

団長の女　「そんなこと二度と言っちゃいけません。どうしてあなたはそう好き嫌いが激しいのかしら。誰に似たのかしらねえ、ああ、この可愛いお顔は私似ね。可愛いからって甘やかしすぎたんだわ」
ピエルカッチ　「どうせピエリーナが全部食べちゃうよう」
団長の女　「そんなことないわ。ちゃあんと残してるようきつく言っておきましたからね。美女ちゃん、美女ちゃん、ピエリーナはもう食べてないでしょうね」
絶世の美女声　「だいじょうぶよ。頬の肉をとってるわ」
団長の女　「まあ、おいしいところ。よかったわねえ」
ピエルカッチ　「ピエリーナにあげてもいいよう」
団長の女　「まったく呆れた子だわ。ピエタンだってねえ、知ってるでしょ、本当はお野菜のほうが好きなのに、文句言わずに食べてるじゃないの」
ピエルカッチ　「……」
団長の女　「死んじゃうわよ」
ピエルカッチ　「……死んだほうが」
団長の女　「(被せて)みんな悲しむわよう。嘆いて嘆いて、嗚咽を漏らして、頭を掻きむしって、ピエタンとピエリーナなんか、ほうら想像して御覧なさい。あなたを追って死んでしまう二人を想像して御覧。きっと死んだことを後悔するわよ。みんなが苦しむ様を見てあなたはどれだけ後悔したって遅いのよ」

全員声　「ウチらがおるのに死んでまうん？」
ピエルカッチ　「ああ……ああ……」
団長の女　「ほうら、私の可愛いピエロちゃん。さあ言って。お肉はなんて美味しいの」
ピエルカッチ　「お肉はなんて美味しいの」
団長の女　「今日もお肉に感謝します」
ピエルカッチ　「今日もお肉に感謝します」
団長の女　「いいわ。さあ、感謝して食べましょう。今日のオヒトニクは格別よ」

団長の女、退場。

ピエルカッチ　「食べたくないよ」

舞台、照明が消える。

ピエタン、ピエリーナ声　「食べなきゃ死んじゃうよ」

2

声　「カーニバルリズムよ」
声　「ドキドキしてきた」
声　「楽しみ」
声　「ほら静かにして」
声　「はじまるよ」

舞台、明るくなる。
パフォーマンス（ダンス、紙吹雪等）
ピエリーナにスポットライト。

ピエリーナ　「刮目せよ。今宵の魔法の目撃者は君たちだ」

パフォーマンス。
ダンサー、ジャグラーなどが舞台を華々しくする。

ピエリーナ　「さあご挨拶にとライオンのお出ましだあ。この客席を無事飛び越えることが出来るのか。見事成功だ。ようし帰っておいでえ。ぎゃあ、危ない。ビース、ライオンにピエロは踏み潰さないように言っておいて」

笑い声。

ビース、ライオンを引き連れて退場。

ピエリーナ　「お次は華麗なジャグリングショー！　って、あらら、ピエルカッチはまだ出番じゃないぞう」

ジャグリングをしながらピエルカッチが登場。その後ろをジャグラーが追いかけてくる。

笑い声。

二人、良いタイミングで追いかけっこをしたまま退場。

ピエリーナ　「うちのピエロが失礼しました。仕方ないので急遽出番です。カーニバルリズムが誇る絶世の美女による綱渡り。命綱などございません」

と絶世の美女が登場。舞台上を綱渡りのように歩いていく。

その反対からピエタン登場。絶世の美女を見つけはしゃぎ駆け寄る。

ざわめき声。

ピエリーナ　「あわわわわわ」

綱の上から落ちそうになるピエタンに絶世の美女が手を伸ばす。

間一髪抱き止められるピエタン。

拍手。

ピエリーナ　「こらピエタン、次の準備はどうしたの」

ピエタン、大慌てで来た道を引き返す。

絶世の美女、ピエタンに続いて綱を渡りきる。

ピエリーナ　「うちのピエロが失礼しました。さてお次、皆様が目にいたしますのは、なんともなんとも不思議な箱でございます」

ピエタン、ピエリーナ、縦長の箱を押しながら登場。

ピエリーナ　「こちらの箱、種もしかけもございません。しかしあらあら不思議も不思議、なかに入ればたちまち不思議。さあそこのお嬢さん、ちょっと入ってみませんか？」

と、ピエリーナが客席を示す。
客席から女客1が立ち上がり、手を引かれるまま舞台へ。
箱のなかに入る。

ピエリーナ　「さあ目を閉じて」

と箱の扉が閉まる。

ピエリーナ　「次に箱を開いたとき……」

と、また扉を開ける。

ピエリーナ　「少女の姿はありません。どこに行ってしまったか？　少女を探したい人は是非箱のなかへどうぞ。誰かいませんか？　ほらほら手を上げてチャレンジャー」

ざわめき。
賑やかな雰囲気。
ピエリーナ「はいじゃあそこのお兄さん」や「いいねえいってみよう少年」など、客席を指差している。

女客　「は、はい」

と客席から手が上がる。
ピエリーナ、それを無視。
舞台、だんだん暗くなる。

女客　「私も入りたいです」
ピエリーナ　「じゃあみんな、舞台へどうぞ」
女客　「私を選んで」
ピエリーナ　「順番にね。ひとりずつゆっくりとだよう」
女客　「私も……」

舞台、暗くなる。
暗くなった舞台へ女客が登壇。
じっとその場で立ちつくす。
ピエルカッチが登場。

ピエルカッチ　「舞台はもうお開きやで」
女客　「しゃ、しゃべった」
ピエルカッチ　「そりゃしゃべるで」
女客　「だって舞台じゃしゃべらなかったから」
ピエルカッチ　「そういう役割なもんでな」
女客　「あの、とっても素敵な三日間でした」
ピエルカッチ　「あんた毎日来てくれてたな」
女客　「えっ」
ピエルカッチ　「ピエロは案外まわりしっかり見てるんやで。毎日足運んでくれておおきにな」
女客　「皆さん素敵でしたけど、最初見た時から、特にピエルカッチさんのファンになったんです。こう、一言も喋らないのに、身体を動かすだけで感情をあんなに表現してるの、すごいなって」
ピエルカッチ　「そりゃピエロとしては当然やけど、嬉しいわ。精進します」
女客　「本当に素敵で……」
ピエルカッチ　「ありがとうなあ」
女客　「世の中にこんな素敵なことがあるんだって知らなくて」
ピエルカッチ　「照れるなあ」
女客　「これから、家に帰らなきゃって思うと」
ピエルカッチ　「気をつけてなあ」
女客　「明日からまた、カーニバルリズムのない生活に戻るんだって思うと」
ピエルカッチ　「戻りたくないんか」
女客　「……」
ピエルカッチ　「帰りたくないんか」
女客　「……」
ピエルカッチ　「帰らな」
女客　「……」
ピエルカッチ　「帰らなアカンで」
女客　「……でも、帰ったらまた」
ピエルカッチ　「はよう帰り」

ピエリーナ　「あれえ、その子どないしたん」
ピエルカッチ　「なんでもないよ。今から帰るんやって」
ピエリーナ　「そうなん。ピエルカ、はよう来なお肉なくなるよ」
ピエルカッチ　「分かってる」
ピエリーナ　「どしたん珍しい、突っ込んでよ。アンタが食べてしまうんやないかいって」
ピエルカッチ　「ちょっとぼうっとしてたわ」
ピエリーナ　「ヤバいやろお、それ、最近まともに食べてないから、頭まわらんくなってきとんちゃうん」
ピエルカッチ　「ああ……」
女客　「ピエリーナさん」
ピエリーナ　「はい？」
女客　「あの、舞台だと、言葉が」
ピエリーナ　「そりゃ大事な大事なお食事さんの前でこんな野暮ったい言葉使われへんやろ」
女客　「お食事さん」
ピエルカッチ　「お客さん、やろ」
ピエリーナ　「ああ、なんや間違えてもうたかな。ええやん、そんな変わらんよ。お嬢さんも、ゆっくりしてきな」
ピエルカッチ　「もう帰るよ」
ピエリーナ　「そう。(笑って)死なんうちにはよう来いや」
ピエルカッチ　「(笑って)死なんうちに行くよ」

ピエリーナ、退場。

女客　「仲良いんですね」
ピエルカッチ　「家族みたいなもんやからな」
女客　「楽しそう」
ピエルカッチ　「騒がしいだけや。毎日誰かが喧嘩しとる」
女客　「へえ」
ピエルカッチ　「今からウチらご飯やねん。あんたもお休み」
女客　「……」
ピエルカッチ　「またどこかでな」
女客　「帰ったら殴られる……」

ピエルカッチ、足を止める。

女客　「帰りたくないんです」
ピエルカッチ　「ウチにはどうしようもできひんわ」
女客　「ここで働かせてもらえませんか」
ピエルカッチ　「はあ？」
女客　「雑用でも何でもします」
ピエルカッチ　「無理や。外部の人間は雇われへん」
女客　「お願いします」
ピエルカッチ　「やめとき。アンタはよ帰らなあかん」
女客　「うちの親、ひどい酒飲みなんです。いつも殴られるんです。きっとそのうち殺される」
ピエルカッチ　「殴られるんが怖いん？」
女客　「え……そりゃ」
ピエルカッチ　「死ぬのが怖いんか？」
女客　「……殴られるのも嫌。死ぬのも、多分……」
ピエルカッチ　「多分？」
女客　「……分からない。死んだら楽な気もする」
ピエルカッチ　「……そうやな。死んだら楽よな」
女客　「……」
ピエルカッチ　「あんた、大切な人とか、おらんの？」
女客　「います。幼なじみのようちゃん」
ピエルカッチ　「ええやん。分かるよ。大切な人おるから死なれへんねやろ」
女客　「……(頷く)」
ピエルカッチ　「じゃあはよ帰った方がええ。サーカスっていうのはな、素敵な夢が終わったら、待ってるのは悪夢やねん。こんなところにおったらあかんよ」
女客　「ここは悪夢なんですか？」
ピエルカッチ　「そうや、悪夢のなかや」
女客　「ピエルカッチは、ずっと悪夢のなかにいるんですか？」
ピエルカッチ　「そうや。ウチはずっと悪夢のなかにおるんや」
女客　「だから泣いてるんですか？」
ピエルカッチ　「ピエロは泣かれへんよ。やからこうして自分の涙を頬に描いてしまうんや。それを見て誰かが笑ってくれるからな。自分の涙もピエロにとっては道具やねん」
女客　「泣けないなんて、悲しい……」
ピエルカッチ　「有り難いことに、そんな感情なくなってもたわ。もう、とうの昔にな」
ビース声　「ピエルカさん、はよう来てください」

絶世の美女声　「お肉がなくなっちゃいますよう」
ピエタン声　「ピエルカ、何してんねや」
ピエルカッチ　「ウチ、なんや今日は食べたくない」
ピエタン声　「そないゆうて、最近全然お肉食べてないやん」
ピエルカッチ　「わかってるわ」
ピエタンの声　「今日は食べな」
ピエルカッチ　「わかってるって」
ピエタンの声　「死なんうちにはよ食べや」
ピエルカッチ　「死なんうちに食べるよ」

愉快な笑い声 SE。

女客　「死んじゃうんですか」
ピエルカッチ　「ああ……」
女客　「お肉食べないと」
ピエルカッチ　「まあな。変やろ」
女客　「でも、私もお肉好きです。食べなきゃ死ぬぐらい好きってことはないですけど」
ピエルカッチ　「ハハハハ。アンタおもろいなあ。そうか、好きなんか……。そうか……。ウチは嫌いかな。ほんまは食べたくないねん」
女客　「好きじゃないんですか？」
ピエルカッチ　「うん……」
女客　「美味しくないんですか」
ピエルカッチ　「美味しいけど……美味しいけど、そういう問題じゃないんよ。なあ、アンタ、帰りたくないんやろ。せっかくやし、ちょっとだけジャグリング見せたるわ。今一生懸命練習してんねん。得意じゃなくてなあ、おとぼけ役やけど上手に越したことはないやろ」

ピエルカッチ、舞台袖から道具を取り出し、軽くやってみせる。

女客　「(楽しげに拍手)」
ピエルカッチ　「アハハ、舞台以外で芸見せたなんて知られたら団長に怒られてまいそうや」
女客　「あ、団長って、シルクハットの人ですか」
ピエルカッチ　「ビース。ビースが団長っておもろいけど無理無理、違うわ。団長はとっくの昔に死んでしもた。ウチが殺してもてん」

女客　「え」

ピエルカッチ　「団長が食べるオヒトニクをなあ、こっそり牛とか、豚とか、鳥とかなあ、その辺りに変えてん。団長はなあ、味覚がおかしくなってたから、気づかんかってんなあ。オヒトニク食べられへんままなあ、ボロボロ崩れて死んでしもてん。オヒトニク食べへんとウチらは人の形すら保たれへんねんからなあ(楽しそうに)」

女客　「……」

ピエルカッチ　「ウチもなあ、死んでしまいたいねん。でもなあ、やっぱ大切な人がおるって難儀やなあ。団長のことも大切やった。団長がおらんくなったらな、何か変わると思ってん。ああ、そんなことなかった。現実突き付けられただけやった。食べなこうなるって、人でありたいなら人を食べなあかんって」

女客　「ピ、ピエルカッチさん、あの」

ピエルカッチ　「食べたない食べたない食べたない。ウチ食べたくないねん。でもな団長が言ってん。普通の人間が豚を食べるのと何が違うのって。ピエリーナはなあ、美味しい美味しい言って喜んで食べるから、ウチも、ああ、そうなれたらなって」

女客　「私、そろそろ」

ピエルカッチ　「ピエタンなんか笑えるで。こんな一族に生まれて野菜大好きピエロや。でもなあやっぱオヒトニクは定期的に食べなあかんやろ？　文句言わすに食べてるわ。私なんか食べる度に思ってんねん。ご先祖さまなんで人の肉食べたんって。あんたらが食べたからあ、食べへんくてもよかったのに食べたからあ、ウチらは今食べへんと死んでまうような不便な身体になってしまったんや。全部ご先祖さまのせいや。ウチの悪夢はウチが生まれる前から続いてるんや。いっそ狂えたらいいのに、狂えたらいいのに、狂えたらいいのに」

女客　「私帰ります！」

間。

ピエルカッチ、ゆっくり冷静に戻る。

ピエルカッチ　「……ああ、気をつけて帰り。ウチらも今日でこの街とはおさらばいばいや、はよう準備せえへんとな……」

ピエリーナ　「ピエルカァ、おそいからお肉なくなっちゃったよう」

ピエタン　「お前が全部食ったんやろうが」

ピエルカッチ　「そうか……」

ピエリーナ　「ああ、でも良かったわあ。ピエルカ、そろそろ食べな倒れてまうよ。ほうらピエタン、言ったやろ。まだ帰ってないわ」
女客　「私、今から」
ピエリーナ　「いいやん、もうちょいゆっくりしていき。帰りたくないんやろ？　夢の世界って素敵やもんなあ、アンタみたいな子、フフ、いっぱいおんねん」
ピエタン　「ごめんなあ。悪く思わんといてくれ」

ピエタン、手を伸ばす。
女客、逃げるように舞台袖へ。
ピエリーナとピエタンが楽しそうに追いかけ退場、ずるずると女客を引き摺りながらすぐ舞台へ戻ってくる。

女客　「あ……あ……」
ピエルカッチ　「なにしてんねん。帰したり。ウチ、今なんも食べたくない」
ピエリーナ　「食べなきゃいけないのよう」
ピエルカッチ　「食べたくないねん！」
ピエタン　「食べなきゃ死んじゃうよう」
ピエルカッチ　「……死んだ方がいいよう」
みんな　「ウチらがおるのに死んでまうん？」

ピエルカッチ、ふらふらと女客へ。
女客、震えているがされるがまま。
ピエルカッチ、女客の首元を引き寄せる。

ピエルカッチ　「ああ……ああ……」

ピエルカッチが女客に噛み付こうとすると同時に舞台、暗くなる。

ピエルカッチ　「食べたくないよ」
ピエタン、ピエリーナ声　「食べなきゃ死んじゃうよ」

幕